

# 震災の経験を語り継ぐ 新しいツーリング事業 一般社団法人「おらが大槌夢広場」

「初めは、ボランティアの方々に食事を提供するくらいしかできなかった。そのうち、ボランティアの皆さんに、この町をもっと知ってもらおうと思って、ぼつりぼつりと語り部ガイドを始めた。初めは嫌でしょうがなかったが、みんなに話を聞いてもらっているうち、こちらが救われた気分になった」と話すのは、一般社団法人「おらが大槌夢広場」代表理事の臼沢和行氏。多い時には1日300人、これまで延べおよそ1万5000人に大槌町の思い出を語ってきたという。

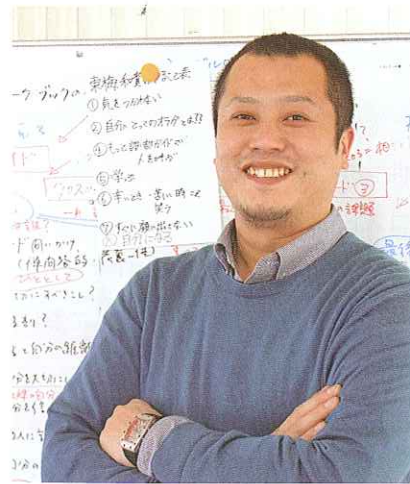
ツアー事業に本気で取り組もうと思ったきっかけは2011年11月、まだ被災の爪痕も深く途方に暮れていた臼沢氏らを、インドネシアから来たアチェの子どもたちが訪問した時だ。彼らはスマトラ沖地震の津波で両親を亡くし、孤児になった子どもたちだった。子どもたちは「大丈夫だよ。津波で何もなくなったけど、きっといい町になるから」と語りかけてきたという。

臼沢氏は「貧しい国で、両親が亡くなった子どもたちが、なおキレイな目で大丈夫だよって言ってくれたことに、とても勇気づけられた。何もなくなったことで、かえって大事なものは何かがあったのではないかと。子どもたちのまっすぐな目が、そう私たちに教えてくれた」と当時を振り返る。

「おらが大槌夢広場」がユニークなのは、高校生から高齢者まで、さまざまな人が語り部となり、一人ひとり全く異なったエピソードを、自分の言葉で参加者に語り掛けることだ。通常、「語り部ガイド」はある程度の台本を用意し、その通りに客に読み聞かせる。しかし臼沢氏はそのことにずっと違和感を持っていたという。一人ひとり、大事な思い出や物語は違うはず。自分の言葉で、自分のことを話しているうちに、『それなら私にもできる』と高校生や地元の人たちが語り部を買って出てくれるようになったという。

## 企業研修プログラムを開始

ツアー客と接するうちに、この町の人々が体験した経験こそが、この町の財産なのではと感じるようになった。



一般社団法人「おらが大槌夢広場」代表理事の臼沢和行氏

そこで「おらが大槌」では、単なる視察ツアーだけでなく、町の経験を生かした新たな企業研修プログラムを開発した。

「大槌町はゼロになってしまったが、それは焼け野原になった戦後と状況が一緒。何もないからこそ、見直さなければいけないもの、本当に大事なものが見えてきた。防災ではなく、私たちの経験をもとに、リーダーシップやコミュニケーションの重要性を勉強できるワークショップができるのではないかと考えた」（臼沢氏）。

研修プログラムは、相手によってオーダーメイドで作り上げる。語り部ツアーをはじめ、林業体験などできるだけ地元の人々と接することに多くの時間を割いているという。ユニークなのは、チームで「負の自己紹介」をしあうことだ。「皆さん企業研修では、どうしてもほかのメンバーに負けたくないという思いが強くなってしまふ。自己紹介でまず自分の負の部分を紹介してもらうことで、自分の弱みを見つけ、チームの大切さを学んでもらう。多くの人が犠牲になったこの町で、自分の言葉で自分の弱さや後悔までさらけ出す語り部の話を聞いた後では、自然と心の鎧を脱ぐことができる」とする。

研修プログラムの中で圧巻なのは、独自に開発した「クロスロード」だ。実際に大槌町が直面した問題について、参加者は当事者として決断を下さなければいけない。臼沢氏によると、判断と決断は違うという。判断はさまざまなリスクを考慮し、無難な道を選ぶ方法。決断は、あらゆるリスクをリーダーが背負い込んで、町の行く末を決めるものだ。「例

えば、旧役場の解体問題。実際に賛成派、反対派の人を呼んで、話を聞かせたうえで住民の前で決断してもらうこともある。体験した参加者からは「怖かった」といわれることもある。怖いからこそ、チームの必要性がわかる」。2015年は41企業を受け入れ、リピーター率は8割を超えるという。なかには世界的な企業もある。

ほかにも、研修では企業からのリクエストに応え、林業や農業など体を動かす研修も取り入れた。

「林業はもともと3K職場と呼ばれていたが、ここでは林業に生きる意義を見つけて生き生きと働いている人たちがいる。そういう人たちに、つらくても、給料が低くても最高の仕事をしている姿をプレゼンしてもらい、研修生に自分たちの仕事の価値は何に置いてもらうかを考えてもらう」（臼沢氏）

こちらでも臼沢氏が伝えたいのは、チームワークの重要性だ。ただひたすらマキを割る研修では、1人だけが優秀でもチームとしての成績は悪くなる。

臼沢氏は「これからもこの町ならではの変わったワークショップをやっていききたい」と話す。

## 被災経験を通じた学びの町へ

「人と出会うことで、人は変わることができる。多くの外部の人と接することで、この町の人たちも変わってきている。大槌町を、自分たちの被災経験を通じた『学びの町』にしていきたい」と、臼沢氏はコミュニティ・ビジネスの新しい1つの形を目指す。



大槌町のシンボル「ひょうたん島」

## 「人は人で成長する」

岩手県大槌町企業研修プログラム 概要

### ●リーダーシップ研修

行程例：4時間から

ツアー内容	所要時間(分)	概要・目的
語り部ガイド	60～80	町民の思いを感じながら、「心の鎧」を脱いでいく
ヒアリング	60	キーパーソンにヒアリングし、彼らの行動の裏にあった覚悟を知る。 例) 震災後、事業を立ち上げた人 例) 仮設住宅で自治会を立ち上げた人 例) 避難所運営の指揮にあたった民間の人
ワークショップ	90～150	大槌で実際にあった課題をもとに、参加者各自がリーダーとして決断を下すワークショップ

### 研修効果

- 覚悟を決める
- 決断する
- 共感力を養う

### 参加者の声

- 決断することがこんなに難しいとは思わなかった。(メーカー 企業/人事)
- 決断と判断の違いを理解した。リーダーとして「決断」するためにも、仲間の思いを「聴き」「感じる」ことが必要だと感じた。(データ会社 管理職)
- リーダーとして、仲間との信頼関係をどう築いていくかを新たに考えさせられた。(商社 CSR担当)

### ●新人研修・企業研修

行程例：1日～数日

ツアー内容	所要時間(分)	概要・目的
語り部ガイド	60～80	町民の思いを感じながら、「心の鎧」を脱いでいく
活動	半日～数日	町内で目的にあった活動を行う
ワークショップ	60～120 ×日数	町民との対話やクロスロードワークショップなど、研修目的により様々なワークショップを組み合わせる 例) 食品流通会社×町民によるB級グルメ開発 例) 震災後、起業した町民やリーダーとなった若者との対話 例) 町の課題に対して、企業としての関わり方を考える

### 研修効果

- 働く意味を考える
- 人と人との関わりを考える

### 参加者の声

- 何かを成し遂げるには、1人ではなく「チーム」の力が必要だと再認識した。(化粧品会社 新入社員)
- 「ありがとう」と言われた経験は、今後つらいことがあった時に必ず励みになる。(建設会社 人事担当)
- 会社や自分以外に目を向けるきっかけになった(運送会社 社新人)

「岩手県大槌町企業研修プログラム」より抜粋